



## 関谷 真先生追悼文

川崎医療福祉大学学長 江草 安彦

川崎医療福祉大学開学以来、関谷真教授と11年間、大学の在り方、新しい知の融合としての医療福祉の学問体系づくり、そして本学の教育研究の独自性などを語り続けた。本学の草創期という同時代に生きたものだけに通じ合えるものを持っていた先生が、6月21日に急逝された。悲しみに堪えない。

関谷真先生を失い、茫然として立ち尽すなかで、関谷先生との出会い、語り合った日々が時間の経過とともに思い出される。

川崎学園創設者、川崎祐宣先生から川崎医療福祉大学創設についてお話を伺った時、私は数ある大学なかで、本学の教育目標・教育内容の独自性を明確に主張しなければ存在の意義がない。そのためには、生命科学としての医学と複雑な社会に生きる人間の生活の尊厳の確立を目指す福祉学を融合した、医療福祉学という新しい知の体系づくりという途方もない大きな課題に取り組むことが最大の目標であると考えた。

それぞれの学科では、建学の精神の下に教育・研究をすすめる教授陣を得る努力をする。同時に、もっともエネルギーを費ったのが、生命科学・生命倫理という「人間理解」の根幹をなす分野の担当者を得ることであった。旧知の上智大学生命科学研究所の柳瀬上智大学元学長と青木清教授をたずね、協力を求めた。無理な願いではあったが、本学の創設の意義を理解していただき、直ちに関谷真先生を推して下さった。

関谷真先生は、上智大学で哲学・神学を学び、哲学修士号を得られ、さらに上智大学理工学部に入學し、化学を専攻、大学院で生命科学を専攻し、理学博士号を得られた。その後、上智大学理工学部で生化学の教育・研究にあたられた。引き続き、イタリアのミラノ大学薬理学研究所で生命科学の研究、イギリスのオックスフォード大学セントクロスカレッジで生命倫理学を研究された。川崎医療福祉大学の教授となるための人生ではなかったかと思われる道を歩かれた。早速お目にかかり、温和人柄を感じる笑顔のうちに、川崎医療福祉大学建学の考え方に賛意を示し、就任をご承諾いただいた。まさに「神に感謝!!」であった。

川崎医療福祉大学での関谷先生は、学生に大らかな包容力で接しつつ、自らは緻密な科学者としての論理性とともに、全体を俯瞰する視点を持ち、双方をバランスよく調和させながら教育・研究をすすめられ、Practical Liberal Artsを目指しておられた。

創設12年目を迎えた本学は、建学の精神を成熟した姿で発展させる時期を迎えている。次のステップを語りあわねばならない時である。こうした時に先生を失った打撃は計り知れない。しかるに、関谷真先生は、主のみもとに召されたのである。主よ、先生に永遠の安らぎを与え、あなたの光の中で憩わせてくださいと祈る心境である。

## 川崎医療福祉大学保健看護学科教授 大林 雅之

関谷真先生に最初にお会いしたのは、上智大学大学院の入学試験での面接の時であつたろうと思います。その時、先生がどのような質問を小生になされたかについては定かには記憶していませんが、以来、先生からは20数年にわたる御指導を受けたこととなります。

小生は大学院では生命科学基礎論部門に所属し、指導教授である柳瀬睦男先生から研究指導を受けておりました。関谷先生は、生化学・神経科学を専攻されており研究室は異なっておりましたが、神学、哲学の研究者でもあつた先生は、柳瀬先生の研究室でのセミナーや、研究合宿にも参加して下さいました。先生の飾らぬお人柄に触れて、我々院生たちは大いに刺激され、研究への意欲を鼓舞されました。

その後、小生は、北九州市にあります産業医科大学へ就職しましたが、折に触れ、先生にお会いし、お話を伺うことが楽しみでした。

しかし、思いもかけず先生が川崎医療福祉大学の創設時に倉敷に転勤されたことは、小生には二重の楽しみを与えて下さいました。東京や関西の行き帰りに、先生をお訪ねできる機会ができたことと、倉敷で先生と美味しいお酒や魚を食べることができるようになったことです。先生は小生の無理な押し掛けにも優しく迎えて下さり、夜遅くまで、院生時代と同じように議論し、今後の研究への示唆を与えて下さいました。

本年4月に、小生は、先生の御配慮もあり、様々な御縁を感じ、山口大学医学部から本学へ異動することになりました。上記のような関谷先生とのこれまでの思いを胸に新しい地での活動を期して赴任したところでした。

亡くなる二日前に夜遅くまで、これからのことについて話し合うことができたことが今となっては救いになりました。

先生から学んだ最も大事なことの一つは、「広い心を持つこと」と今は思っています。

先生の御冥福を心よりお祈りいたします。

## 川崎医療福祉大学名誉教授 飯田 精一

このたびの関谷真さんのご逝去を悼み、供養のため、つつしんで追悼の言葉を捧げたいと存じます。なんら前ぶれのない突然死ほど、人を驚愕させ、悲しみの深淵に陥れるものではありません、冥福を祈るばかりであります。

いまは遺稿となった学会誌関谷投稿論文「日常生活における価値論の位置」の査読を委員会から依頼を受けて、その蘊蓄と人柄の一端に接触することができました。生前のご本人はこれを土台にして、著書にしたいと抱負を語って居られました。

この関谷論文は、人の日常生活を価値論の立場から分析して、福祉のあり方を探求しようとするものですが、その基礎は「世界内存在」としての人の実存(エキゼステンス)にあるようです。人の実存は、対象の「真偽判断」と「価値判断」とで成り立ち、前者は「実証性」、後者は「明証性」とそれぞれ別個の役割を果たすものであるようです。このことを一層深く追求すると、「真偽判断」と「価値判断」とは、人の実存では同一の価値体系に統合されるものであるらしいのです。そうだとすれば、「世界内存在(sein)」は実は「世界内当為(sollen)」として書き換えるべきものではないでしょうか。

利根川進さんは、モノクロナール抗体産生法を発明しました。これは免疫のシステムに必要な抗体増殖法の研究が基本です。免疫とは、体外から来る抗原の一つ一つに、体内で作られる抗体がうまく結合するとき、抗原を積極的に排除する作用です。ところが抗原は、その「多様の発現」と言って100億種類以上あるのに、これらに対抗する抗体用の遺伝子の3万個程度に過ぎません。これでは免疫のメカニズムは成り立ちません。この矛盾を「DNA組み替え法」の技術でうまく解決したのが、利根川さんでした。これによって、利根川さんは1984年のノーベル生理学医学賞を受賞されました。

抗体が抗原とうまく結合するメカニズムは、ダーウィンの進化論と同じやり方です。即ち結合するのに都合のよい対象抗原を、「選択する仕方」と「突然変異でうまく合致するように変異する仕方」の2通りを使用するのです。人間個人の免疫は、「ダーウィンの進化過程を極く短時間でやり遂げるので、利根川さんは、こうした世界内のパワーを「ダーウィンの小宇宙」と呼びました。

こうした世界内のパワーは、パイプルの「ヤウエイ」と全く同じ働きをするもののようです。アブラハ

ムは古代ウルの文化圏から脱出して、洋々たるユーフラテス河や月の砂漠を放浪しながら、バビロン、ハラン、ダマスカスを経てカナンの地へ到達しました。その間に、アブラハムは「ヤウエイ」のパワーを幾たびも授かりました。

その後、アブラハムが獲得したパワーは、西欧社会を經由して日本の文化社会にも多大な影響を与えました。とくに、「自由・平等・博愛」の価値・倫理は日本国憲法にも採用されて、平和社会の基礎となりました。

関谷論文は未完の遺稿です。この論文のパースペクティブを、どのように発展させるか期待していただけないに残念無念でなりません。ご冥福を祈ります。

## 故 関谷 真先生のご略歴

昭和11年2月11日	満州でご出生
昭和31年7月	早稲田大学法学部中退
昭和31年9月	上智大学文学部哲学科編入
昭和33年3月	イエズス会入会
昭和38年3月	上智大学文学部哲学科卒業
昭和40年3月	上智大学文学部哲学科ラテン哲学専攻修了 / 哲学修士取得
昭和43年3月	上智大学理工学部化学科卒業
昭和45年3月	上智大学院理工学研究科化学専攻修了 / 理学修士取得
昭和48年3月	司祭叙階
昭和49年3月	上智大学院理工学研究科化学専攻博士課程退学
昭和49年4月	上智大学理工学部化学科助手
昭和51年2月	上智大学院理工学研究科化学専攻 / 理学博士取得
昭和51年4月	イタリア国立ミラノ大学薬理学研究所客員研究員 (昭和52年12月まで)
昭和52年10月	上智大学理工学部化学科講師
昭和54年4月	上智大学院工学部化学及び同研究科助教授 (平成3年3月まで)
昭和55年12月	最終誓願
昭和62年10月	イギリス Oxford 大学 St. Cross College Ian Ramsey Center 客員研究員 (生命倫理) (昭和63年3月まで)
平成3年4月	川崎医療福祉大学専任教授
平成8年4月	川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科専任教授
平成9年4月	川崎医療福祉大学医療福祉学科学科長 (平成11年3月まで) 川崎医療福祉大学医療福祉学部学部長
平成10年4月	川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科博士課程 (後期) 専任教授
平成14年6月21日	ご逝去